

西の菜時記

特集：伊藤博文の大宴会・立ち寄ったお寺成徳寺

山口市菜香亭：〒753-0091 山口市天花1丁目2番7号 TEL:083-934-3312 FAX:083-934-3360

平成29年7月20日発行
第45号

発行元：山口市菜香亭
指定管理者
特定非営利活動法人
歴史の町山口を甦らせる会

菜香亭の扁額はそのとき書かれたものでしょうか。為書に、頼まれて菜香亭主人のために書いた、とあります。このときは菜香亭初代齊藤幸兵衛は亡くなっており、二代目主人鶴蔵にあてたものと思われま



明治32年5月に山口に来たときの伊藤博文。このとき57歳。すでに首相を3回務めていた。



菜香亭大広間に掲げられている扁額の書「一家天地自春風」

の藤の花に見立てた電灯をつけていました。庭木には無数の球灯を下げて、近所からは火花が打ち上げられました。ほとんどお祭りです。伊藤博文は大広間の会場に入る前に、料亭主人の本宅で呼ばれるまで待っていました。

この日の料亭菜香亭の飾りは、まず、門前に国旗を交差させ、そのまわりに藤棚をつくって紫色

これは翌年創立する「立憲政友会」のためで、広く理解と参加を求めて行脚されたのです。その一環で、5月31日山口に来訪されました。菜香亭にある伊藤博文の扁額に揮毫した日付はありませんが、為書に「滄浪閣主人博文」とあります。伊藤博文は明治23年神奈川県小田原に別荘を建て、「滄浪閣(そうろうかく)」と名づけました。明治30年には同県大磯に本邸を建てて小田原から引越し、こちらを滄浪閣としました。伊藤博文は料亭菜香亭にたびたび来ていますが、滄浪閣ができたあとで来たということは、明治32年の来山のことと思われる。

料亭菜香亭も気合いを入れて迎えた

伊藤博文の帰郷・大宴会

伊藤博文は、明治32年、全国を遊説しました。これは翌年創立する「立憲政友会」のためで、広く理解と参加を求めて行脚されたのです。その一環で、5月31日山口に来訪されました。菜香亭にある伊藤博文の扁額に揮毫した日付はありませんが、為書に「滄浪閣主人博文」とあります。伊藤博文は明治23年神奈川県小田原に別荘を建て、「滄浪閣(そうろうかく)」と名づけました。明治30年には同県大磯に本邸を建てて小田原から引越し、こちらを滄浪閣としました。伊藤博文は料亭菜香亭にたびたび来ていますが、滄浪閣ができたあとで来たということは、明治32年の来山のことと思われる。

◆菜香亭市民ギャラリー出展作品紹介・予定表◆

<市民ギャラリー出展作品の紹介>

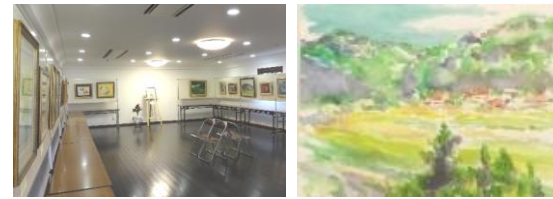
第7回フレッシュフラワー&プリザーブドフラワー
アレンジメント作品展
—フラワーサークル デンファレ— 4/8~4/9



ひろまり絵画教室展~創造性豊かな山口の子どもたち~
—ひろまり絵画教室— 6/10~6/11



やまぐちの四季絵画展 Part2
—なのはな絵画クラブ— 5/12~5/14



山口の春を彩る陶芸作品展
—陶酔工房— 4/22~4/23



<平成23年度 市民ギャラリーの予定>11月

月日	時間	タイトル	主催者
8/11 ~13	10時~16時(最終日のみ17時まで)	いぬのはなし Part II in 山口	三浦和詩
8/25 ~27	10時~17時(最終日のみ16時まで)	創作展・有趣— Omomukiari— 幕末維新をテーマに	防長史楽会
9/6 ~11	9時~17時(初日10時~、最終日16時まで)	私が感じた山口のステキ	絵♥楽

出展ご希望の方は、2ヶ月前までにお申し出ください。
(お問い合わせ) TEL: 083-934-3312
FAX: 083-934-3360

万福寺の黒地蔵

万福寺は、かつて江戸時代萩往還の高札場があった札の辻から石州街道に50メートルほど進んだ堂の前町にあり、地蔵堂があったことが町名の由来となったと言われています。

黒地蔵は、龍福寺の末寺である万福寺のご本尊で、江戸時代に龍福寺から移されたと言われています。

像高116センチ、檜材寄木造りの主像に全身を黒漆が施されていることから「黒地蔵」と呼ばれ山口の町衆から親しまれてきました。

山口市がファイバースコープで頭部を調べたところ内部に銘文があり、「天文19年(1550年)、願主は第31代当主大内義隆、像の作者は仏師覚継(かくけい)と記載されていたとのこと。

覚継は、足利義植像を作成した京都の高名な仏師であり、右手を頬に当て右膝を立て左足を踏み下げる姿勢をとっており、この姿勢の像は延命地蔵菩薩と言われ、南北朝から室町時代に流行したものとされています。このため、黒地蔵は、山口市指定文化財となっています

又、この黒地蔵は山口六地蔵の一つとして今なお二十四日の地蔵縁日への信仰が続いています。

なお、毎年7月20日から行われる山口祇園祭の神事として八坂神社に奉納される「鷺の舞」は堂の前町の方々により引き継がれ、万福寺が「祇園祭鷺の舞・出立ちの寺」として行列を組んで八坂神社まで練り歩きます。

「鷺の舞」も南北朝時代大内弘世が京都から神霊を勧請して八坂神社を創建した際、同じように神事として移したものとして伝えられています。同時代に造られた黒地蔵もお寺の奥から「鷺の舞」が出立する光景を毎年優しく見守っていることでしょう。



百人以上の参列者が集まったところで、伊藤博文が登場し、県議員の徳田譲甫が客席をたつて会を代表して挨拶しました。「公の労を讃えるためにささやかな会を設けたので、お酒を酌み交わして楽しんでください」と発声すると、伊藤博文は、「諸君の厚意をありがたく思う」と応え、乾杯しました。酒が何回か巡ったところで、中学校や洞春寺での講演で話しそびれたことがあるのでこの席で話したいと、伊藤博文が条約改正に関する苦勞を述べはじめました。「……不平等条約の改正については先輩諸公が苦心された。明治4年岩倉使節団で米國に渡り交渉が始まり、それから20年それぞれの政權において一進一退を繰り返す交渉が重ねられ、ついに明治25年私が総理大臣になって陸奥宗光が外務大臣になった。このとき青木周蔵が英國公使で、明治27年首尾よく条約改正問題は調印されたのである。……」世間に知られていない話もあり、また大臣として関わった事蹟を直接その人の口より聞かされるので、満場は感に打たれ、時々近くで打ち上げる歓迎の花火のほかに静寂が満ちました。伊藤博文は演説後も杯を手にして座客の問いに答えたそうです。数十名の芸妓が入場し三味線などの演奏が始まると、場は一気に陽気になりました。さらに、下関の奇人又兵衛が女装して登場、芸を見せ、最後に腹踊りを始めたのでみな大笑い。伊藤博文も相好をくずし声をあげて笑われたのでした。



紙芝居「菜香亭物語」より イラスト: taeco